

目次

序 飯島宗一(学長)

I

乳幼児のコミュニケーション——言語発達とその障害 若林慎一郎(医学部助教授)

1

人間独特のコミュニケーション手段であることばの出現とその発達について、児童精神医学の臨床的立場から論述をし、次いで、ことばの発達の障害とその治療についても紹介し、乳幼児期における言語発達について、一般的な知識を啓発し、理解を深めていただくように記述をした。

親と子のコミュニケーション 久世敏雄(教育学部教授) 19

親または子は、情報、感情や意志などを、言語的または非言語的手段によって、直接的にあるいは間接的に、子または親に伝達する。親と子のコミュニケーションは、親子の伝達行動の交換過程を検討することにより、明らかにすることができる。そこで、ここでは、親と子の伝達行動の過程が対照的である、と思われる乳幼児期と青年期の二つの時期をとりあげて、親と子のコミュニケーションの特徴を考察する。

教育における共感と離反 田畑 治 (教育学部助教授) 37

教育は、意図的なもの(「教化」と無意図的なもの(「感化」)の両面を包含した営みである。そしてこれらは、教育者と被教育者との間に織りなされる人間関係を媒介にして展開される。教育が生きたものに展開していく構造を「共感」、死んだものに展開していく構造を「離反」と名づけ、基本的人間観、態度、関係の特質、内的体験の諸相、結果・成り行きについて論じる。

教育の場におけるコミュニケーション 加藤雄一 (総合保健体育科学センター教授) 55

——不適應学生、とくに対人的困難を訴える青年のコミュニケーション
 青年期延長と言われる現代は、青年期における自我の分化、構造化と相俟って、青年に、一方では同一性の確立を困難にし、留年、卒業延期、学業アパシー、自殺、対人的困難などとしてその危機をあらわしている。とりわけ対人的コミュニケーションの危機の直接的表現であり、学生相談の中で最も多い対人的困難という状態についてのべ、あわせて家族の問題、このような青年への接近において配慮すべき若干のことをのべた。

II

成人社会のコミュニケーション——言語的表現と非言語的表出 辻 敬一郎 (文学部教授) 71

成人社会のコミュニケーションにおける言語と非言語の役割を相互に関係づけながら考えてみる。進化の過程で言語を獲得した人間には、動物的基礎をもつ古い非言語的表出はもはや手がかりとして不要になってもよさそうであるが、実際は両種の表現手段にもとづく伝達の二重構造が強められてきた。この章では、それぞれの特徴を明らかにし、さらには現代情報化社会における個人間の意思伝達にあらわれた変化の傾向にもふれる。

日本人のコミュニケーション 大坪一夫（総合言語センター助教授）

89

コミュニケーションを考えるとき、言語そのものという見方と、言語の使用という見方の二種を区別する必要がある。日本人は、日本語を実際の重要さよりも低く評価しているようだ。また、自国語が世界の中であまりにも奇妙な言語だと信じてしまっている。言語の使用者としての日本人は、言葉が無ければ自分の意志を他人に伝えることができないとは信じていないようだ。しかし、世界の多くの人々は意志の伝達に言語は不可欠と考える。

現代日本社会とコミュニケーションの構造転換

貝沼 洵（教養部助教授）

105

——現代社会論の視角から

近年のコミュニケーション・メディアの「融合」化は、社会管理の強化・効率化の要請によってもたらされた。その結果、メディアと人間との関係が変化し、メディアとの接触が対話を欠いた「密室」で営まれることの問題性が、広汎な領域で生じている。このモノログ・コミュニケーションは、メディアの無原則な受容に特色があり、日本文化の基底をなしてきたものである。したがって、メディアを国民が使いこなすには、この基底文化の変革が必要である。

III

経済活動とコミュニケーション——日本と欧米諸国との経済摩擦 真継 隆（経済学部教授）

125

日本と欧米諸国との間にしばしば生じる経済摩擦問題は、構造的で根の深いものであり、歴史や政治や文化にも関わっている。その解決のためには現状を整理し、短期、中期、長期の視点に立って総合的に対応策を講じ、外交の場でより良いコミュニケーションを目指していかなければならない。

中小企業の国際化と海外進出

瀧澤菊太郎（経済学部教授）

141

最近日本中小企業への関心が世界的に高まっている。これは各国での多様な中小企業関心の高まりと日本中小企業の国際化とが原因になっている。後者の基盤である日本経済の国際化は、昭和四五年頃を境にして変質し、同時に日本中小企業問題への対応策も変化した。日本中小企業の海外進出は、中小企業対策的視点と国際協調・協力的視点からみる必要があるが、問題点も多いので事前の慎重な情報収集・分析と周到な準備が重要である。

南北問題とコミュニケーション

佐分晴夫（金沢大学法学部助教授）

159

——新世界情報コミュニケーション秩序をめぐって

コミュニケーションは政治的、経済的、文化的力として機能する。それゆえ、国際社会ではその構造変化に対応して、とくに南北問題解決のために現在進められている新国際秩序樹立運動の重要な一環として、コミュニケーション問題が扱われている。形成途上にある新情報秩序は、コミュニケーション権を基礎に、各国の情報主権の尊重と各国の実質的平等の確保を柱とするものであり、国内秩序の改革と一体のものとして捉えられている。

住民参加とコミュニケーション

島津康男（理学部教授）

175

地震予知の警報が出た時、人々はどんな行動をとるか？ その時、どんな情報をどのよう
に提供したらよいのか？ 開発業者と住民とのコミュニケーション機能を期待された環境
アセスメント制度はどれほど有効か？ などを考え、組織（行政機関・開発業者）と個人
とのコミュニケーションについてのべる。

コンピュータとこれからのコミュニケーション 福村晃夫 (工学部教授) 193

デジタル技術の発達により、情報技術の基幹である情報の処理 (コンピュータ)、伝達 (通信)、蓄積管理 (データベース) の技術が統合化され、すべての情報システムはよりインテリジェントになろうとしている。その目的は人間とのインタフェースの抜本的改善である。これからのコミュニケーションもその一環として、知識ベースを具備する知的システムとして機能するであろう。

新しいコミュニケーションは人間社会をどう変えるか 川又 晃 (工学部教授) 211

コミュニケーションの重要な手段である通信技術の歴史と発達過程を伝説の時代から現代まで展望し、人類にとって通信手段と技術がどれだけ重要であるかを明らかにする。最新の通信手段である光通信やデジタル通信やINSについてやさしく解説し、そのねらいと効果を明らかにするとともに、人間にとって通信技術の発展が何をもたらすかを功罪両面にわたって探究する。

動物のコミュニケーション 伊藤嘉昭 (農学部助教授) 229

動物のコミュニケーションは化学的コミュニケーションが圧倒的に優位な点で人間のそれと異なる。そのような動物コミュニケーションの特徴を人間と比較しつつ紹介し、最後に、動物の社会行動の進化に関する最新の学説を紹介する。